審 査 の 結 果 の 要 旨

氏　名　　関　由賀子

本研究は初期分裂病において最も高頻度に認められる自生記憶想起について、87 例の陳述例を対象として、想起される過去の体験にはどのような内容があるのかという横断的諸相と、新たな症状形成という縦断的諸相に分けて症候学的検討を行い、下記の結果を得たものである。

１．想起される過去の体験にはどのような内容があるかという横断的諸相については、〈些事〉(66.7%)、〈テレビ・新聞・マンガ〉(12.6%)、〈夢〉(5.7%)、〈病的体験〉(6.9%)、〈不快事〉(48.3%) の５種が抽出された。このなかでもとりわけ重要な点は〈不快事〉の記憶想起が〈些事〉に次いで多く、症例の半数近くが有しており、もっぱら〈些事〉に注目してきた旧来の定義の不十分性が指摘されたことである。

２．新たな症状形成という縦断的諸相に関しては、もっぱら先の、新しく見い出された〈不快事〉の記憶想起を原基として、不快気分・自他に対する攻撃性亢進と神経症様症状、空笑や独語、自生空想表象、自己所属感の希薄化、関係念慮、被害妄想・妄想追想などの極期症状の６種に及ぶ多彩な症状形成が指摘された。それらの６種の症状形成のうち自己所属感の希薄化、関係念慮、被害妄想・妄想追想などの極期症状の３種が分裂病の極期への進展を表わすものであり、これは自生記憶想起のうち〈不快事〉が想起されることは病期が初期から極期へと進展する可能性が高いことを示唆するもので、臨床上の注意を喚起するものとなった。

１）不快気分・自他に対する攻撃性亢進と神経症様症状は、まずは感情面への影響として現れ、過去に体験したときの不快感情がそのまま随伴していたり、想起された内容が不快なものであるがゆえに新たに不快な気分におそわれ、時には自もしくは他への攻撃性を示すようになる。またさらにヒステリー様症状や強迫症状などの神経症様症状を呈する症例も認められた。このような二次的な反応が激しい場合は、表面化している二次的な反応によって診断をしてしまうことで誤診につながるおそれも高くなるものと思われた。

２）空笑や独語（自生笑と自生発話）は自生記憶想起として現れた過去の情景的場面に没入して、思わず知らず笑いが、あるいはまた言葉が勝手に口をついて出てしまったものである。空笑や独語は、ともすると外的表出のみで往々病期がより進んだもの（例えば、極期である幻覚妄想状態とか）と理解されがちである。しかし、いまだ初期段階の症状である自生記憶想起に随伴して、その情景的場面に没入するがゆえに現れることもあるのであり、安易な解釈は戒められるべき好個の実例と思われた。

３）〈不快事〉の想起から、同じ自生体験という形式を取りながらその内容が過去に実際にあったこと（自

生記憶想起）から空想的なもの（自生空想表象）へと発展している例が認められた。その空想表象の内容は二つに大別でき、その一つは自らの自殺の具体的な様子が浮かぶという自傷に向かう内容であり、他の一つは想起された相手に対して暴行を加えるという他害に向かう内容である。これは前項で示した自他に対する攻撃性亢進が、自生空想表象という新たな病的体験として表現されたものであると考えられた。

4）自生記憶想起の自己所属感が希薄化し、本来の自分の心のほかにもう一人の自分の心を感知するという二重心を思わせる訴えが認められた。自己所属感の希薄化～二重心の感知は純然たる初期分裂病症状と極期症状の中間に位置している症状であり、自生記憶想起の自己所属感の希薄化は病期としては初期よりもやや進展したものであると判断された。

5）〈近事〉を素材とし、自生的に想起されることによって自責的な方向への新たな意味づけが生じている例が認められ、これは自責的あるいは自罰的な関係念慮であるといえた。〈近事〉は患者自身の現在の生活とより密接に関わっている出来事であるからこそ患者自身が固着しやすいのであり、このような体験に関して自責的・自罰的な意味づけが生じるために、社会生活の不適応が生じる可能性があると思われた。

6）〈不快事〉が繰り返し想起されることによって、自生記憶想起に基づく症状形成が、はじめは不快気分・自他に対する攻撃性亢進だったがものが、やがて新たな自生空想表象に発展し、それに反撃すべく独語（自生発話）がみとめられ、さらに自生空想表象の内容が具体的な他者からの迫害という自生空想表象の被害妄想化と呼べるものに進展し、ついには妄想追想を形成するに至っているさまがみてとれる陳述が認められた。自生記憶想起が基となって記憶性妄想知覚が生じたことの指摘は、従来たんに静態的定義が与えられてきたにすぎない妄想追想の動態的定義ないし発現機序に光を与えることとなり、精神病理学上も重要な示唆を与えるものとなった。

以上、本論文は初期分裂病に認められる自生記憶想起を、その陳述内容の解析から想起される体験内容は何か（横断的諸相）、また自生記憶想起を基にしていかなる新たな症状形成が生じるか（縦断的諸相）の２つの観点から分類し、その新たな症候学的特徴と臨床的意義を明らかにした。本研究はいまだ十分に知られていない自生記憶想起の症候学的理解と、さらには初期分裂病の診断ないし分裂病の早期発見に重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。